

長期投与が患者に与える影響について

- 服薬指導とコンプライアンス 9 -

たけの薬局

高野 真里、中曽根英明、齋藤 勝裕
坂入美智子、和田 由華、竹野 信吾

1. 目的

平成14年に保険上の長期投与制限が廃止される以前の当薬局で調剤する慢性疾患の処方箋は、圧倒的に14日処方が多数でした。状態が安定している患者さんでも薬をもらうために2週間ごとに病院に通っている人たちがほとんどでした。適応症として長期投与が認められていた薬剤もありましたが、それが認められない薬剤が混在していることで、長期投与ができないものが多かったような気がします。

長期投与は、患者さんにどのような影響を及ぼしたのでしょうか。

今回、私たちは長期投与とコンプライアンスについて着目し、長期投与になる前と後のコンプライアンス（服薬率）を比較検討しましたので報告いたします。

2. 方法

(1) 施設

たけの調剤薬局及びたけの薬局下妻店の2施設において、実施いたしました。

(2) 対象患者

平成14年4月以降に長期投与となった患者さん271例を対象としました。

* 長期投与は2回連続で15日以上処方があった場合に開始と判断しました。

(3) 除外基準

前後1年以上の服薬率をできるだけ正確に求めるため、下記項目に該当する症例は除外しました。

長期投与になる前の服薬期間が1年に満たない人

長期投与になった後の服薬期間が1年に満たない人

2ヶ月以上の休薬期間がある人

症状により服用しない可能性のある薬剤（痛み止め、胃薬など）のみを服用している人

継続中の処方を他医療機関・薬局などでもらった人

上記に該当した112例を除外し、残りの159例を比較検討しました。

(4) 服薬率の求め方

$$\text{服薬率 (\%)} = \frac{\text{期間内に投与された対象薬剤の処方日数 (A) の合計}}{\text{投与された対象薬剤を服用するのにかかった総日数 (B)}} \times 100$$

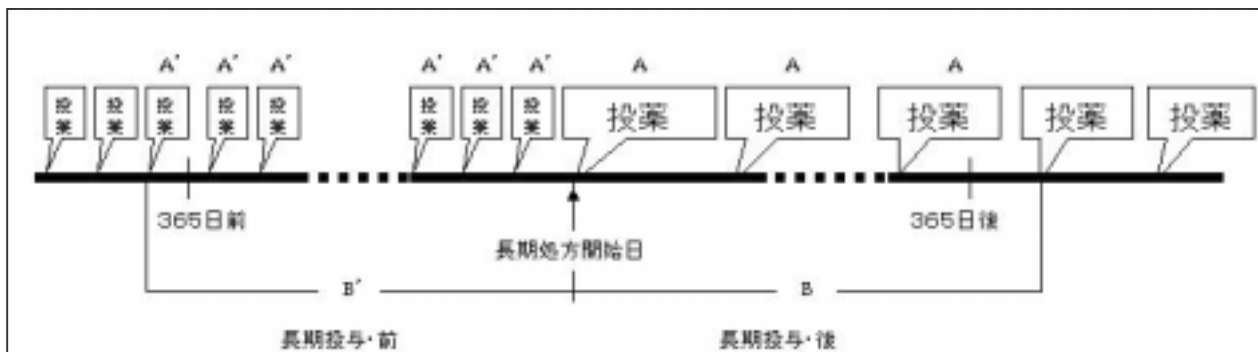


図1 服薬率 (%) の求め方の模式図

3. 結果

- (1) 長期投与により服薬率は改善する傾向にありました。
- (2) 年齢の低い症例ほど、服薬率が改善していました。
- (3) 女性よりも男性の方が、服薬率の改善が顕著でした。
- (4) 長期投与・前の服薬率の低い症例ほど、長期投与・後に改善していました。
- (5) 処方日数は長い方が改善する傾向にありました。

4. 考察

薬が長期投与されることにより「便宜性」が増すことで、服薬率が改善した症例が多いことが推察できました。しかしながら、来局間隔が長くなることで服薬指導の機会も減り、服薬コンプライアンスや副作用などを含む患者の状態を把握しにくいといったリスクの増大も考えられました。以上のことより、今後の服薬指導の重要性が示唆されました。